

—春の久木・岩殿寺が舞台—



久能谷（久木）を散策し、行きついた岩殿寺の和尚から聞いたのは、通りすがりに見かけた家に住む美しい女性に関する不思議な話だった。『春昼後刻』では、寺からの帰途女性と対面する。その後、海辺で起こった事は……。明治39年の作品。

..... 逗子が登場する場面

この山の裾へかけまして、ズッとあの菜種畑の辺、七堂伽藍建連なっております。書物にも見えますが、三浦郡の久能谷では、この岩殿寺が、土地の草分と申します。／坂東第二番の巡拝所、名高い霊場でございますが、唯今ではとんとその旧跡とでも申すようになりました。

鏡花は病氣療養のため二度にわたって逗子で過ごした。4年にわたる逗子滞在で、夏の長者カ崎が舞台となった『草迷宮』を始め、逗子を背景とする作品を多く生み出した。



泉鏡花文学碑（大崎公園）

『きことわ』 朝吹真理子 あさぶき・まりこ

—永遠子が暮らす町、逗子—



葉山に別荘をもつ貴子の家族。その別荘の管理人として働く母親を持ち、逗子で育った永遠子。永遠子は15歳まで、7歳年下の貴子と夏を共に過ごしていた。永遠子は結婚し、逗子に住み続けている。別荘が引き払われることになり、25年ぶりに貴子と永遠子は再会する。

..... 逗子が登場する場面

ダイニングテーブルで百花は足をぶらつかせながら、社会科のグループ学習の宿題をはじめ。 「逗子は地図でみるとイルカのかたちをしています」と百花が読み上げた一文に永遠子は驚いた。永遠子が小学生のころは、「逗子市は地図でみると大きな魚のかたちをしています」と教わっていた。（新潮社）

逗子が登場する文芸作品

逗子市が出てくる文芸作品（小説やエッセイ）をご紹介します。全編にわたって逗子が舞台のもの、作品の中で逗子が重要な役割を果たしているものを集めました。これらの本はすべて逗子市立図書館に所蔵しています。「逗子が出てくる作品一覧リスト」も2Fカウンターにあります。是非ご利用下さい。



『わたしたちの逗子』（2008年版）

「逗子は地図でみるとイルカのかたちをしています」と百花が読み上げた一文に永遠子は驚いた。

—朝吹真理子『きことわ』より—

逗子市立図書館

046-871-5998

2013年3月発行

『不如帰』 徳富蘆花 とくとみ・ろか



—逗子を一躍有名にした作品—

浪子と武夫の夫婦が病気や戦争など様々な障害によって引き裂かれていく物語。浪子は、病気療養のため、父の別荘のある逗子で過ごす。小説のクライマックスは逗子の浜で起こる。明治33年刊行。

..... 逗子が登場する場面

逗子に来てよりは、症やや快よく、四辺の静かなるに、心も少しは静まりぬ。.....

たちまち浪子は立どまりぬ。浜尽き、岩起れるなり。岩に一条の路あり、そを辿れば瀧の不動に到るべし。この春浪子が良人に導かれて行きし処。／浪子はその路をとりて進みぬ。

『自然と人生』所収の「湘南雑筆」は、蘆花が明治32年の逗子での自然描写を記録したノートからの抜粋。元旦の描写に始まり歳除（大晦日の夜）に終わる。

逗子の美しい自然を情緒豊かな筆致で描き、「湘南」という言葉のイメージが高められた。

『日本国語大辞典』によると、「湘南」という言葉の初出はこの作品。



不如帰の碑（逗子海岸）

『小春日和』 野中柊 のなか・ひいらぎ



—逗子に住む双子の姉妹の物語—

1967年の早生まれの双子。姉は小春、妹は日和、ふたり併せて小春日和と名付けられた。語り手は妹の日和。

..... 逗子が登場する場面

小春と私は海の音を聞いて育った。家が逗子海岸の近く、歩いて三分ほどのところにあっただ。 （青山出版社）

『なぎさホテル』 伊集院静 いじゅういん・しずか



—1978年冬から1984年まで、ここで暮らし—

著者が逗子の「なぎさホテル」で過ごした約7年間の日々をつづったエッセイ。作家として表舞台に立つ以前の日々が描かれている。

..... 逗子が登場する場面

その冬の午後、私は東京での暮らしをあきらめ、故郷の山口に帰る支度をし、東京駅に立っていた。.....一関東の海を少し見てから帰るか。／横須賀線に乗って降り立ったのは、逗子の駅だった。小さな駅だった。

.....

この二十年、私が作家として何らかの仕事を続けられてきたのは、あのホテルで過ごした時間のお蔭ではなかったか、と思うことがある。

（小学館）

～伊集院静によるなぎさホテルについての短いエッセイ～

「逗子なぎさホテル」

「カレーライス」

「逗子なぎさホテル・最後の日」

（『神様は風来坊』所収）

「逗子なぎさホテル・最後の海」

（『あの子のカーネーション』所収）

『どんぐり姉妹』 よしもとばなな

—姉のどん子と妹のぐり子—



風変わりな名前を付けた仲良しの両親を突然の事故で失っていた姉妹。一緒に住んでいた祖父の死から立ち直れないでいたぐり子は、初恋の人が事故死したと知り、彼が住んでいたという逗子に弔いに訪れた。逗子訪問を機に少しずつ、今という現実を受け入れられるようになっていく。

..... 逗子が登場する場面

逗子の駅を降りると、日差しだけが夏のようで、一瞬寒さを忘れた。.....／この町は川の町で、川の景色のほうが海よりも目立つように思う。.....／海辺は寒く、犬の散歩をしている人しかいなかったが、光の中にいる人や犬はまるで別の世界にいるように神々しかった。 （新潮社）